

第1回 白川・緑川学識者懇談会 議事概要

平成26年9月26日（金）13:30～15:15

於 熊本河川国道事務所1階会議室

【出席者】

山田委員長、井田委員、内野委員、大本委員、小林委員、下津委員、馬場委員、弘田委員
森山委員

【規約案等】

- ◆規約については、規約（案）のとおり了承され、平成26年9月26日より施行となった。
- ◆規約第5条（委員長）に基づき、委員長は山田委員が選出された。
- ◆規約第6条（公開）については、公開方法（案）のとおり了承された。

【要旨】 ■：委員 ●事務局

《現整備計画内容の点検》

（結果の概要）

現河川整備計画の点検結果については、了承された。

（治水に関する意見）

- 土砂堆積だけでなく、H28.6.26 水害から流木対策も加える必要がある。
- 流域全体の特性、特に上流部の氾濫による流量低減について考慮する必要がある。
- 白川では下流の氾濫域と上流の流域特性を把握することが重要であり、上下流を一体的に考えるべきである。
- 点検、見直しについては、しっかりとやらないと行けない。
- 黒川をどう扱うかという問題は、何十年も前から議論してきたが、解決されていない。
- 今後、整備計画メニューについて検討をする際は、本日頂いた意見を参考に、今後の懇談会の場で議論・意見をお願いしたい

（環境に関する意見）

- 魚類に関しては、白川は洪水時に流速の遅い箇所（逃げ場所）が少ないため、水際処理についても検討する必要がある。
- 堰に設置されている魚道が役に立っていない現状がある
- 洪水時の魚類の逃げ場（シェルター）について、計画時から積極的に考慮してほしい。
- 菊池川や緑川などは川幅が広くして、流速の遅い場所を確保することも行っている。川は

自然であるべき

- 白川は、ヨナが流れてきて、水辺の国勢調査等の結果を見ても他の河川に比べ種が少ない。
大規模な河川改修を行う上でまず堤防を作ることが大前提ではあるが、水辺の環境を考えて魚が逃げる場所等の確保などの工夫を行って行きたいと考える。
なお、実施中の激特事業では、低水路の多様性についても考慮しながら事業を進めていくことを考えている。

(防災に関する意見)

- 危機管理に関し、H24.7.12 洪水時には、代継橋地点で急激な水位上昇が発生しており、避難に要するリードタイムが十分に確保できていない。そのため、代継橋だけでなく上流の立野地点の実際の水位，更には阿蘇黒川および白川からの流量などを反映した情報提供であれば、リードタイムが確保できると考える。
- リードタイムについては、「いつ、どこで」と言う情報について、昔から計算できるようにやってきたと思う。
- 現在、上流の降雨から3時間後の代継橋水位を予測し、防災情報として提供している。

(景観に関する意見)

- 景観に関して、整備計画本文には、一般論はあるが具体的内容が分かりにくい。しかし、その後「水辺空間計画」が整備計画の参考として策定され、具体的目標が分かりやすくなった。そのため、激特事業において、景観についてそれをベースにスムーズ進めることが出来た。防災や魚類等についても、同様に検討したら良いと思われる。
- 今後、個別にワーキングを設けるなど検討していきたい。

2) 白川直轄河川改修事業再評価

結果の概要

白川直轄河川改修事業については、原案どおり事業継続で了承された。

- ：委員、●事務局
- 施行について、現在の方法であれば、防災効果の高まりによる安心感や、景観の向上に関する効果といった項目がみえてこない。数値化は難しいかもしれないが、どうすれば反映できるのか考えてほしい。
- 効果がみられる場所に着目して表示するなどしてはどうか
- 日本は、他国と比較して浸水想定精度検証について十分でない。流速などについても表示する必要があり、もっと細かいメッシュ等で検討するべきではないか。
- 再評価として、今回の結果は正しいものといえる
- 一方で、水系として同一の整備レベルでは無いように思えるため、県管理区間と連携した

整備を行っていくことが必要と思われる。

- 事業再評価の検討と、防災の検討は切り離して考えており、今回の検討は全国的に統一の考え方で実施している。
- 水系一貫としての整備を行っている。なお、熊本県も黒川の激特事業で遊水地などの整備を行っている。